

描寫の方法

大下 藤次郎

この頃ある雜誌に日本人の繪は色が生々しいのと、又混ぜ過ぎて其特色を失ふたのと二種あつて、眞正の活きたよい色の出てゐないのは、パレットの上で色を作らずに、畫面でやるからだといふやうな意味の事が書いてあつた。それとは少し事柄は異ふが、水彩畫を描く方法として、ある人は幾度も畫面を洗つて調子を和らげ、ある人は淡い繪具を何遍も塗つて對象と同じ色を出さんとし、又は紫色を描くに、最初に赤を塗り、次に藍を塗るといふやうな仕方て其目的を達し、或は初めより其二色をパレットの上で合せ、直ちに畫面に持つき、又或は假令ば橙色を作る場合に赤と黄と交互に點若くは線を以て紙上に彩り其色を合成するものもある。屢々畫面を洗つて描く方の例としてはターナー先生なども其一人て、水に浸して其繪の乾く迄に、他の作に筆をつけるといふ風で、一時に四枚位ひの繪を描いたといふとである。又洗はぬ方の例としては、名は忘れたが英國の名家で其人は寫生をするにもパレットの他に種々な色のついた紙を用意して置いて、先其紙の上で充分研究して對象と同一の色彩を作り、後初めて畫面に着色するので、一度點じた色の上へは決して再び筆をつけず、恰もモサイクのその如く、近づいて見る時は醜いけれど、相當の距離で見れば色が活躍してゐて頗る立派であるとのとである。思ふに畫面を洗つたり幾度も色を重ねたりする時は、繪に沈澱はあれど色は其本質を失ひ、濁つて死んでしまふ。これに反してパレットの上で色を作り、一度の着色で仕上る時は、繪具の光澤も充分で鮮ではあるが輪廓が硬くなつてしつとりとした風を失ふ恐れがある。夫故描寫の方法は、其一に偏するとなく、對象に應じて種々に工風し、變じてゆかぬばならぬと考へる。若し霧の朝とか、曇つた日の如く、穏やかな場合を寫すには、洗滌若くは重潤の方法が適してゐるであらうが、烈々たる太陽の照らされてゐる景、又は華やかな夕陽とか、凡て鮮麗な境を寫すには、パレットの上で調合して着色する方がよい。乍併、洗つて描くには多大の時間を要し、隨て一枚の繪を飽きずに仕上る忍耐力がいるし、

又後者は、よほど熟練した手腕でなくては、白紙に一度着色してこれに最後迄正しき調子を保たせるといふことは出来ぬから。何れにしても初學の人には困難なる業である。夫故に、私は描寫の方法については極めて自由な考で諸君にお勤めするのにも、方式などにはあまりに重きを置かず、只其目的物を寫し得ればよいといふ程度で何でも澤山寫生を試み、最も便利な方法を自分自ら其經驗によつて發見せられんことを希望するのである。

寫生用遠近法

眞野紀太郎

〔二〕 路上の人(挿圖参照)

此圖は單に人に限らず、電柱街燈の類にも應用さるゝことの出来る、同一の高さのものゝ遠近の割合を示したものである。此圖にては畫者は路傍に在て三尺の高さと見做す。そこで假にA、B、Cの場處に、五尺の高さの人が居るとして其遠近圖を作るには先づ水平線H、Lを引て、畫面なり又は畫面外なりへ垂線を作り、畫面の底より水平線迄を自己の高さ三尺として、其割合て人の高さ五尺即ちE、Fを得、其E、F點から水平線に向つて斜線を畫きG點に結合させる。かく定尺を作つて置て後、Aの人の高さを知るには、AからA'迄線を引きA'、A''の垂線を作り、更にA''よりA、A'に對する平行線を引けば、その平行線の間即ちA'、A''間の幅がAの場處に居る人の五尺の高さとなるのである。BもCも同じ方法によつて畫き現はすものが出来る。勿論此圖は人の高さを同一と見て作つたものであるから、實地に臨んで多少の相違を生ずるのは免れぬ。只この法を知つてゐれば、添景人物が大き過たり、小さ過たりするやうな失策はせぬであらう。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*